

〈報 告〉

<Report> Changes of behavior and consciousness in COVID-19 by Atsushi MATSUBARA, Tetsuo AKIYAMA, Masaharu SAKOU, Hideo YAMANAKA, Norihiro IKEDA, Kazuaki ETOU, Kazuhiko YABUUCHI, Makoto CHIBA, Hirokazu KAIHO, Toshitaka INOUE, Hitoshi TAKENAMI and Hideki HIRATSUKA

コロナ禍における行動と意識の変化

松原 淳\*                      秋山 哲男\*\*                      酒向 正春\*\*\*  
 山中 英生\*\*\*\*                  池田 典弘\*\*\*\*\*                  江藤 和昭\*\*\*\*\*  
 藪内 一彦\*\*\*\*\*                  千葉 真\*\*\*\*\*                  海保 裕一\*\*\*\*\*  
 井上 俊孝\*\*\*\*\*                  竹浪 仁\*\*\*\*\*                  平塚 秀樹\*\*\*\*\*

要 旨

新型コロナウイルスの感染症の拡大と長期化に伴い、世の中はパンデミック状態にある一方でテレワークの普及によって、個人生活にとってはメリットもあると考えられる。そこで現在の行動やコミュニケーション等の意識の変化、さらにフレイルなど健康面の課題について①生活、行動と意識に関するアンケート、②通勤、勤務と行動と意識に関するアンケート 2 種類の Web 調査により実態を明らかにした。その結果、未知のウイルスに対する脅威感から、人々の意識やライフスタイルも大きく変容していて、在宅時間の増加によりメリットもある一方で、時間の使い方は自己への投資などには回っておらず、健康面では不安を抱えていることが明らかになり、フレイル等により健康寿命の短縮が危惧されるなど、新たな日常スタイルに向けての課題があることが明らかになった。

Abstract

With the spread and prolongation of the new coronavirus infection, the world is in a pandemic state, but the spread of telework is thought to have benefits for personal life. Therefore, awareness of current behavior and communication, etc. Regarding changes and health issues such as frailty, (1) questionnaires on life, behavior and consciousness, and (2) questionnaires on commuting work and behavior and consciousness, the actual situation was clarified by two types of Web surveys. As a result, people's consciousness and lifestyle have changed significantly due to the threat of unknown viruses, and while there are benefits to increasing the time spent at home, spending time is not used for self-investment. However, it became clear that he was worried about his health, and that there were issues for a new daily style, such as fear of shortening healthy life expectancy due to frailty syndrome.

キーワード：新型コロナ禍; 意識変化; ライフスタイル; コミュニケーション; 健康不安

Keywords: COVID-19, Change of consciousness, Lifestyle, Communication, Health anxiety

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染症の拡大と長期化に伴い、世の中はパンデミック状態にある一方でテレワークの普及によって、個人生活にとってはメリットもあると考えられる。そこで現在の行動やコミュニケーション等の意識の変化、さらにフレイルなど健康面の課題について、①生活、行動と意識に関するアンケート、②通勤、勤務

と行動と意識に関するアンケート 2 種類の Web 調査により実態を明らかにした。

2. 生活、行動と意識

(1) アンケート調査の概要

アンケート調査は第 4 波と第 5 波の間の 2021 年 6 月に SNS または人伝により拡散し Web により実施した。

* NPO 法人健やかまちづくり NPO Corporation Healthy Town Development	***** 池田技術士事務所 Ikeda Engineer Office	***** 誠心会井上病院 Seisinkai Inoue Hospital
** 中央大学研究開発機構 Chuo University, Research and Development Initiative	***** (株)オリエンタルコンサルタンツ Oriental Consultants Co., Ltd.	***** (株)サンビーム Sunbeam Co., Ltd.
*** ねりま健育会病院長 Nerima Ken-ikukai Hospital Director	***** 東北大学大学院文学研究科 Tohoku University, Graduate School of Arts and Letters	
**** 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 Tokushima University, Graduate School of Technology, Industrial Social Sciences	***** NTT アドバンステクノロジー(株) NTT Advanced Technology Corporation	

a) 回答者数と性別

回答者は 204 名であり、男性 146 名、女性 57 名、回答しないは 1 名であった。

b) 年齢

年代別では 10 代から 70 代までの回答が得られ、40 代の回答者が最も多い。

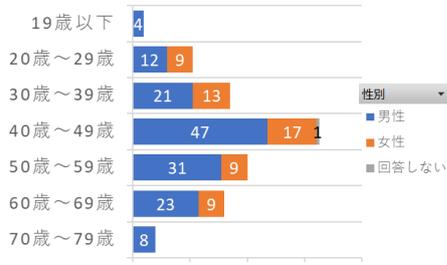


図-1 回答者の年代と性別

c) 職業

職業は会社員が最も多く 157 人(77%)になる。

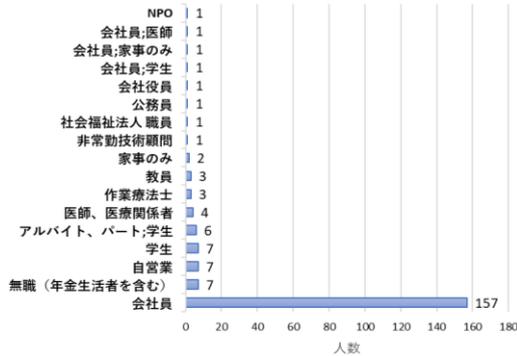


図-2 回答者の職業

d) 居住地域

居住地は北海道、東京都、福岡県、愛知県、大阪府の順で 29 都道府県に及ぶ。



図-3 回答者の居住地

e) 同居の家族構成

家族構成は多様であり独居が 50 名(25%)いる。

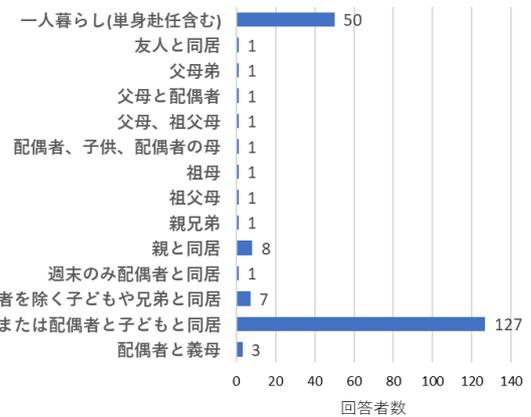


図-4 回答者の家族構成

f) 近隣に交流している人の存在

4 人に一人は近隣に交流している人がいない。

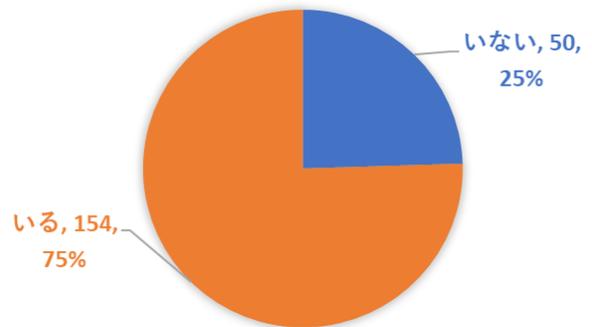


図-5 近隣に交流している人の存在

g) COVID-19 ワクチンの接種状況

ワクチン接種が未接種な人が 7 割近く、2 回接種が 16%いる時点のアンケートである (6 月)。

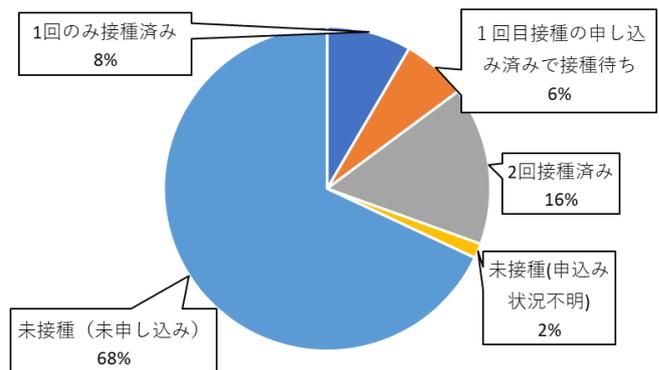


図-6 ワクチンの接種状況

(2) コロナ前後の行動の状況

①COVID-19 の感染がない 1 年前(令和 2 年(2020 年))の正月ごろと、②現在(2021 年 6 月)を比較して、ご自身の行動と活動についての変化を質問した。

a) 外出回数

毎日が158人から98人に減少、逆に週に4～5日が29人から64人に増加しているが、全体としては外出回数が減っている。さらに交通機関による外出を見ると同じく外出回数が減り、COVID-19になって交通機関による外出を全くしていない人も4人いる。



図-7 外出回数の変化

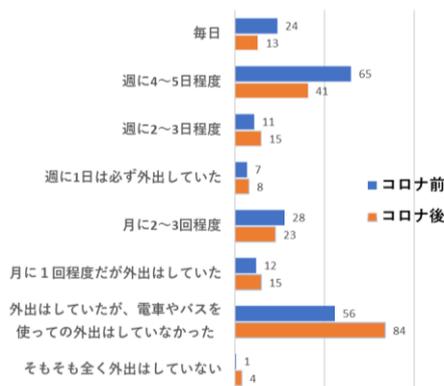


図-8 交通機関に乗った外出回数の変化

b) 外出先(目的)

飲食店への外出が134人から45人、交通機関に乗っての買い物が77人から38人、知人親戚宅への訪問が71人から26人、映画鑑賞・コンサートが64人から6人等、いずれも大幅に減少しているが、仕事で職場等への外出はあまり減少していない。

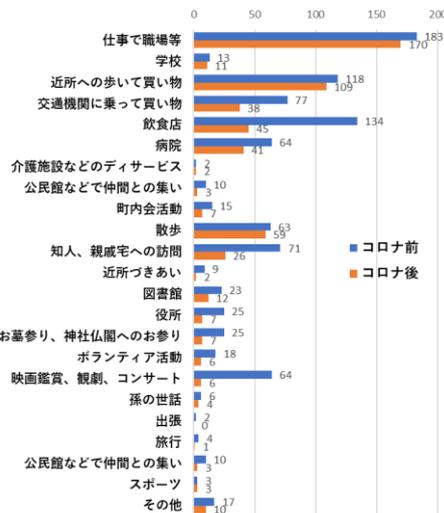


図-9 外出先の変化

(3) 生活と体調、意識

a) 生活の変化

75%の人が、生活が様変わりしたと回答。

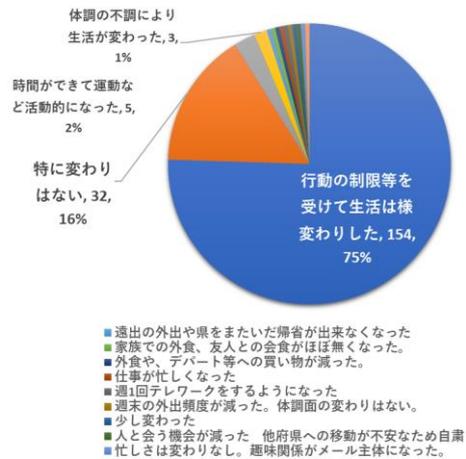


図-10 生活の変化状況

b) 歩行回数と距離の変化

歩行の回数が減った人が半数で、逆に増えた人も10%いる。距離についても同様である。

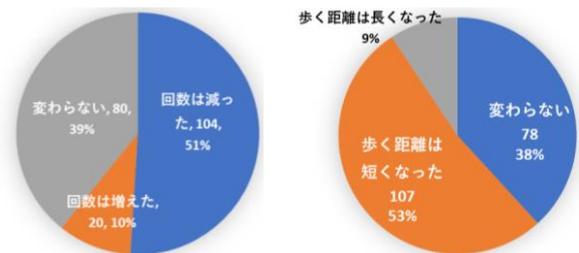


図-11 歩行回数の変化

図-12 歩行距離の変化

c) 運動する機会

運動の機会は、毎日する人を筆頭に減って大幅な減少はないが、総じて微減状態である。

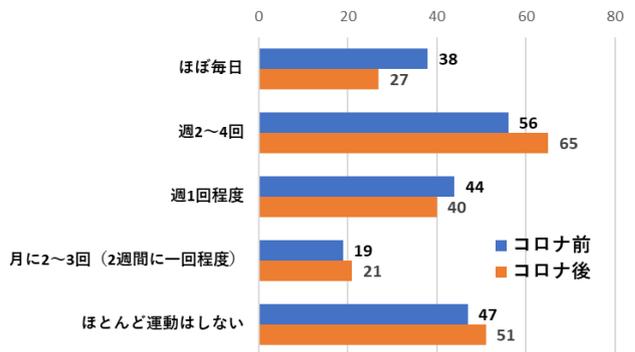


図-13 運動する機会の变化状況

d) 体調・健康面の変化

「すでに体力が落ちていて感じ不安」が67人(32.8%), 「刺激が減って楽しいと感じることが減った」が59人(28.9%), 「外出が億劫になった(外出する気持ちが減った)」が32人(15.7%), 「睡眠が不安定になった(ぐっすり寝られない, 眠れない)」が24人

(11.8%), 「以前は健康に不安ではなかったが今は健康に不安」が 23 人(11.3%)など全年代においてメンタル面の不安定さが感じられる。

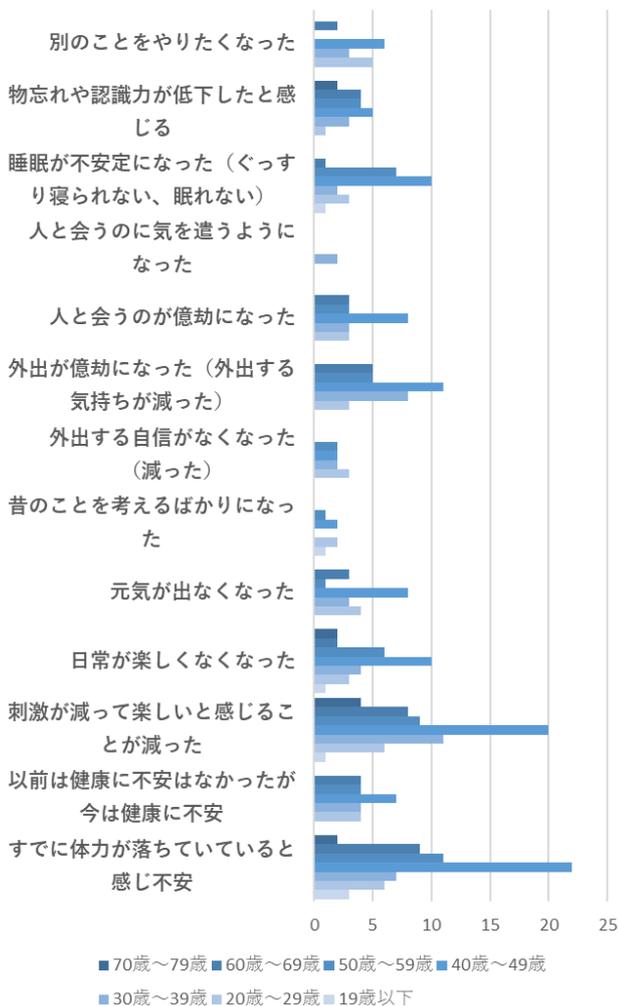


図-14 年代別体調・健康面の変化状況

さらに年代別に意見を分類すると、ポジティブな意見を最も発しているのが30代であった。

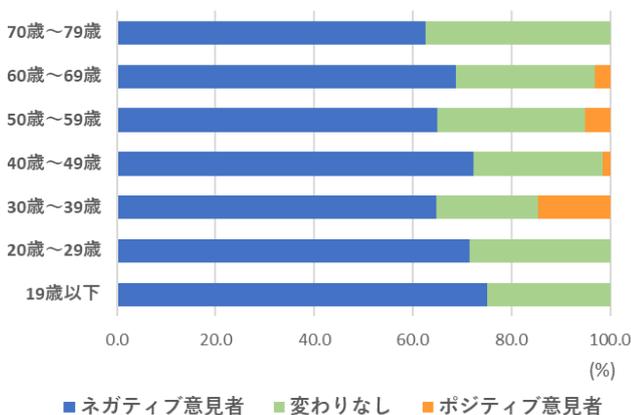


図-15 年代別の意見の状況

#### (4) 外出と周辺状況

##### a) 外出が減った理由

外出が減ったと回答した人が 81%にも及ぶことから、その理由を聞くと、「緊急事態宣言や自粛が言われているので当然の行動である」が 93 人(56%), 一方で、「緊急事態宣言や自粛が言われているが外出したいのがやむを得ず従っている」が 79 人(47.6%)と協力意志の行動もあるが、「コロナが怖いので外出をしたくない」が 58 人(34.9%), 「外出すると周りの目があるので」が 23 人(13.9%)と様々な要因があつて外出を控えている状況もわかる。

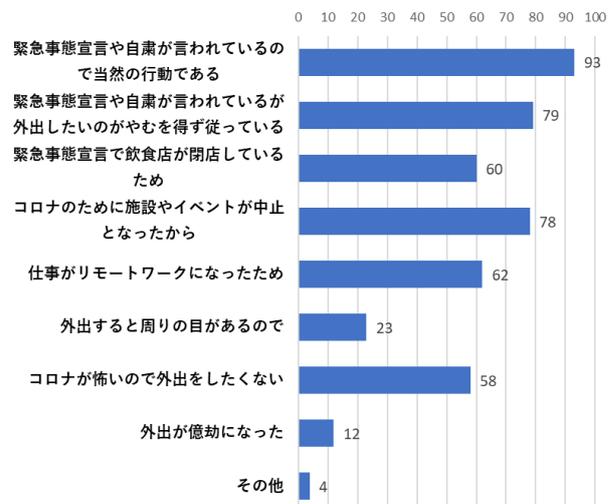


図-16 外出が減った理由

##### b) 不安

「COVID-19 がどうなるか世の中が不安」が 48%, 「自由に外出ができないことが不安」が 35.8%, 「いつのまにか体力の衰えを感じる」が 28.9%と不安感が大多数であるが、一方「不安感がない」という人も 24.5%いる。

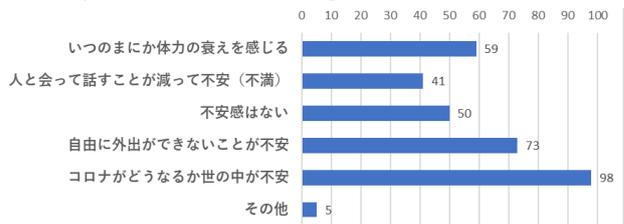


図-17 不安感の状況

#### (5) まとめ

新型コロナ禍における多様な人々の行動と意識の変化のアンケートについて主に単純集計の結果を示した。

多くの人が生活は様変わりしたと答えていて、体力の減少と不安を抱えながら外出・運動の減少の下で生活をしていることが明らかになった。全年代においてメンタル面の不安定さが感じられることから、今後フレイルの課題や様々な精神的な疾患にも影響が及ぶことが懸念される。

### 3. 通勤、勤務と行動と意識

#### (1) アンケート調査の概要

アンケート調査は生活、行動と意識に関するアンケートと同時に第4波と第5波の間の2021年6月にSNSまたは人伝により拡散しWebにより実施した。

回答者は113名と少なめであるが20歳代から70歳代までの言わば現役世代から意識を聞くことができた。勤務先は上場企業からそれ以外の企業まで、職種と立場も様々であるが技術職が多い。

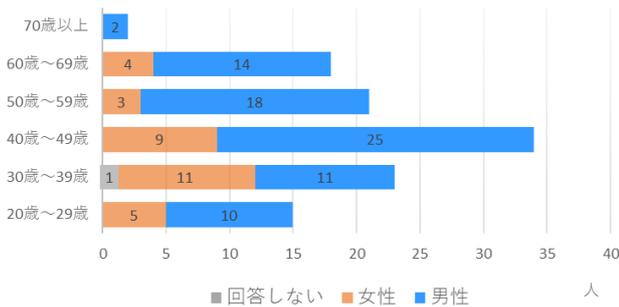


図-18 回答者の年代と性別

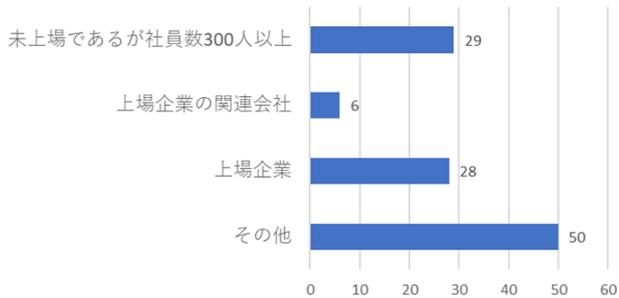


図-19 勤務先

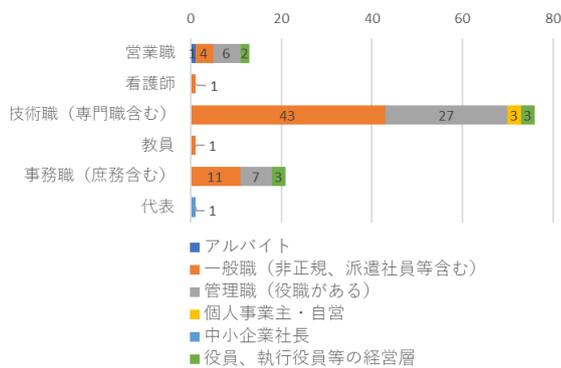


図-20 職種と立場

#### (2) 居住と通勤状況

回答者の居住地は北海道、東京都、福岡県で全体の3/4を占め、他は愛知県、沖縄県と続く。居住形態は配偶者と子どもとの同居が多いが、一人暮らしも1/4いる。

通勤時間は15分未満が最も多いが1時間半まででほとんど分散しているが2時間以上の回答者もいる。

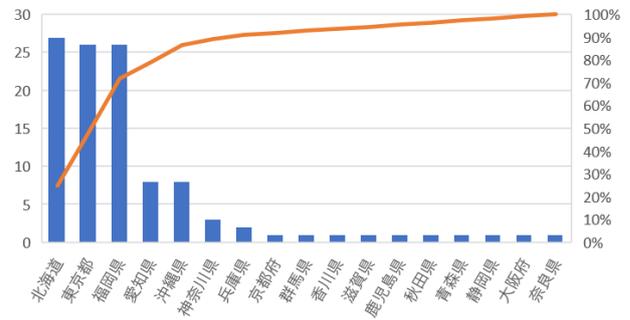


図-21 回答者の居住地

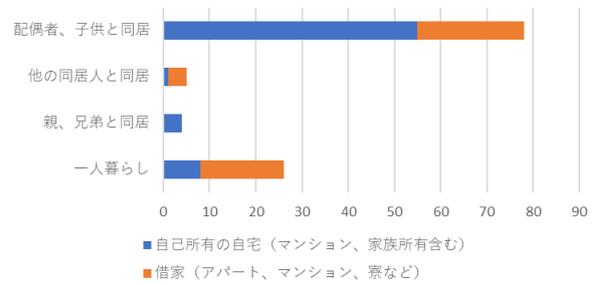


図-22 同居者と住居形態

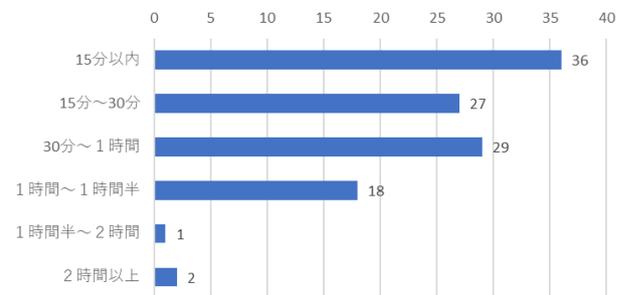


図-23 通勤時間 (片道)

#### (3) 勤務状況の変化

##### a) 勤務態勢の変化

勤務態勢に変化がないのは37%であるが、期限付き、組み合わせを含めテレワークとなった人は60%に及ぶ。しかし、テレワークからすでに通常の勤務態勢に戻った人も若干名いる。この結果、職種による違いや職場での立場による違いには関係はなく、勤務態勢の変化は「変化なし」と「テレワークに代わり今も続いている」の2極化している。

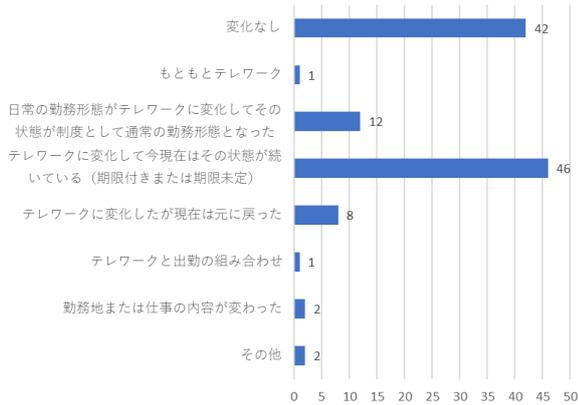


図-24 勤務態勢の変化

b) テレワークの勤務形態

テレワークは在宅勤務が最も多く、サテライトオフィス等と在宅勤務の組み合わせなど、基本的に勤務は必ず在宅で行っている状況である。また、クロス分析の結果、職種による違いや職場での立場による違い、居住地による違いには関係はなく、「在宅勤務に移行」又は「テレワークに移行」が主体である。

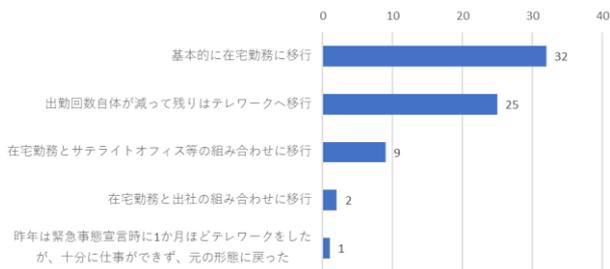


図-25 テレワークの勤務形態

c) テレワークの場所

テレワークで使っている場所を聞くと、シェアオフィスが多いが、カフェなどの飲食店が使われている実態もある。

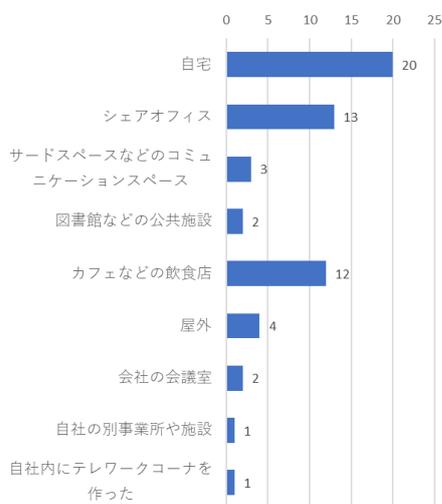


図-26 テレワークの場所

d) テレワーク後の通勤時間の変化

テレワークにより通勤時間が増えた人は皆無であった。

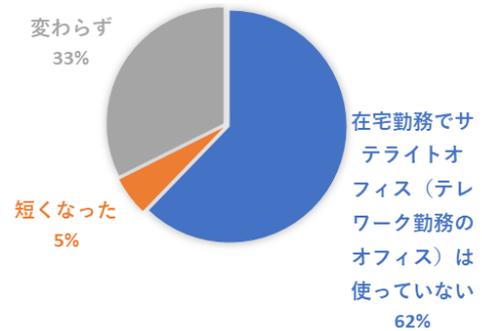


図-27 テレワーク後の通勤時間の変化

e) 勤務時間の変化

テレワーク後の勤務時間については変わらない人が74%いるが、勤務時間がはっきりしなくなっている人も7%いる。また、「以前と変わらず」が大部分を占めている。クロス分析の結果、会社規模による違いや職種による違い、立場による違い、居住地による違いには関係はなかった。

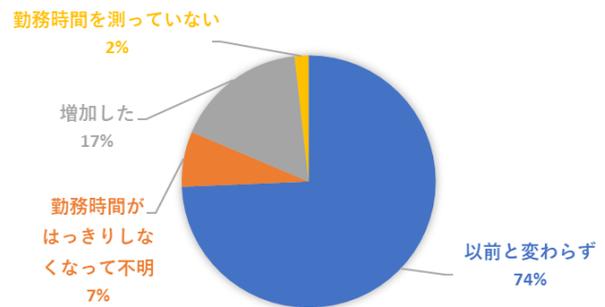


図-28 テレワーク後の勤務時間の変化

f) 出張状況

「出張がなくなった」「回数が減った」は合わせて79%であるが、以前と変わらず出張をしている人が21%いる。また、クロス分析の結果、会社の規模による違いや職種による違い、立場による違い、上位5県の居住地による違いには関係はなく、「出張がなくなった」・「回数が減った」が大部分を占めている。

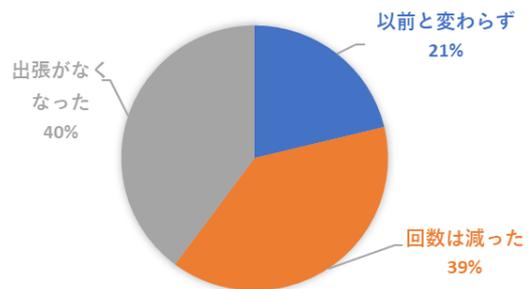


図-29 出張状況

(4) 家族との関係の変化

a) 自宅での食事回数

クロス分析の結果、自宅での食事回数について、上位5県の居住地による違いには関係はなく、「自宅での食事回数が増えた」と回答した人が8割を占めた。残り2割の人は「変わらない」と回答した。

また、年齢による違いで若い世代ほど「自宅での食事回数が増えた」と回答した人に比率が高かった。性別による違いや会社規模による違い、職種による違い、立場による違いには関係なかった。

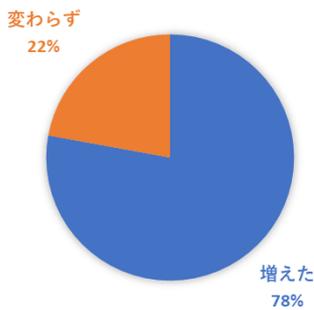


図-30 自宅での食事回数

b) 家族との時間

家族との時間においては、クロス分析の結果、会社規模による違いや職種による違いには関係なく、「同居家族はいない」を除くと「家族との時間が増えた」と回答した人が64%、逆に「家族との時間が減った」と回答した人は3%しかいなかった。

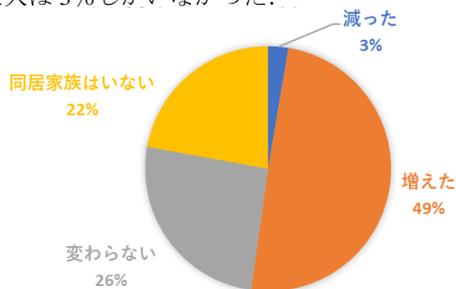


図-31 家族との時間

(5) 運動と体重の変化

a) 運動の変化

運動の変化においては、クロス分析の結果、年代による違いには関係はなく、概ね45%の人が「運動が減った」と回答しており、30%の人が「運動が変わらない」、25%の人が「運動が増えた」と回答している。また、上位5県の居住地による違いに人口密度の高い県と低い県での「運動が減った」人の割合に違いがあった。人口密度の高い県では、60%弱の人が「運動が減った」と回答しており、20%強の人が「運動が増えた」と、20%強の人が「かわらない」と回答している。それに対し低い県では、20%強の人が「運動が減った」と回答しており、

40%弱の人が「運動が増えた」と、40%の人が「かわらない」と回答している。さらに立場による違いや職種による違い、会社規模による違い、性別による違いには関係はなかった。

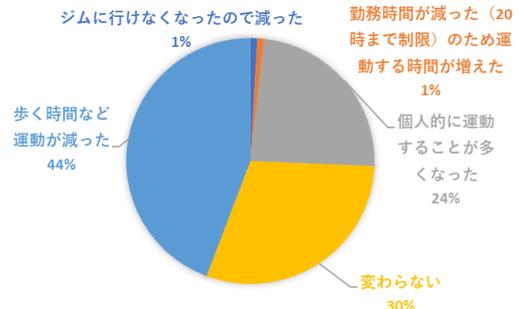


図-32 運動量の変化

b) 体重の変化

体重が増えた人は31%、減った人は11%である。クロス分析で運動と体重の関係を見ると運動が減ったとする人で体重が増えた人の比率が高い。また、体重が増えた人のほとんどが運動することが減ったと回答している。また、年代別で増えた人の割合に違いがあった。60歳以上1割の人が、50歳代で5割の人が、20歳代から40歳代の人には3割の人が増えたと回答している。60歳以上の人は、コロナ禍での運動面であまり変化が少なく、50歳代の人にはコロナ禍での運動面が極度に落ちている人が多いことが起因しているのではないかと推察する。20歳代から40歳代の若い人は、コロナ禍での運動面が同じように落ちても50歳代に人とは違い、体重の増える人が3割程度で収まっていると言える。他に居住地による違いや職種による違い、立場による違い、会社の規模による違い、性別による違いには関係はなかった。

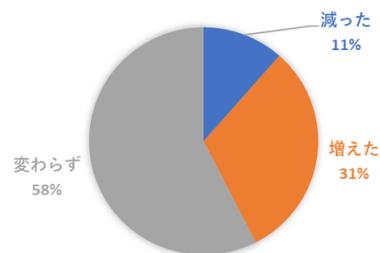


図-33 体重の変化

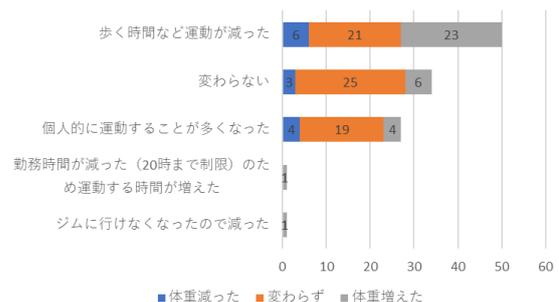


図-34 運動と体重の変化

(6)メンタル面の变化

a) ストレスの変化

ストレスの変化においては、「ストレスが増えた」と回答している人が48%にも及ぶ。クロス分析の結果、そのほとんどの人が、「体調が悪くなった」と回答している。逆に「ストレスが減った」と回答している人は、「体調がよくなった」と回答している。また、ストレスの増減と、運動量の増減には関連がなかった。さらに、上位5県による違いや立場による違い、職種による違い、会社規模による違い、性別による違い、年代による違いには関係はなかった。

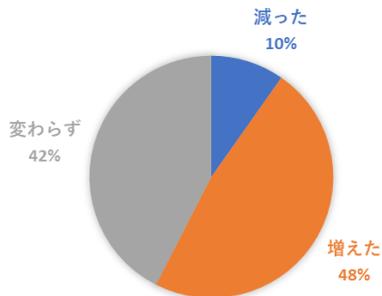


図-35 ストレスの変化

b) 体調の変化

体調の変化においては、クロス分析の結果、「運動が減った」人の4人に1人は「体調が悪くなった」と回答している。また、上位5県の居住地による違いでは、人口密度の高い県と低い県で「体調が悪くなった」と回答している人の割合に違いがあった。人口密度の高い県では、20%強の人が「体調が悪くなった」と回答しており、それに対し低い県では、10%強の人が「体調が悪くなった」と回答している。1割程度の差異があった。また、立場による違いや職種による違い、会社規模による違い、性別による違い、年代による違いには関係はなかった。

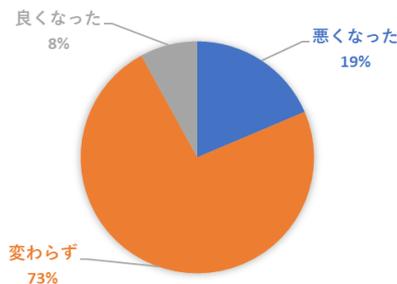


図-36 体調の変化

c) メンタル面の不安

メンタル面の不安がある人は46%に及ぶ。不安の内容については、「コロナがどうなるか世の中が不安」、「自由に外出ができない不安」、「人と会って話すことが減って不安」という不安とともに、すでに体力の衰え

を感じてそれがメンタル面の不安にもなっている。

また、クロス分析の結果、メンタル面での不安感においては、不安がある人の内3人に1人は「体調が悪くなった」と回答している。不安がある人の内3人に2人は「ストレスが増えた」と回答している。不安がない人の内でも30%強の人が「ストレスが増えた」と回答している。

さらに立場による違いでは一般職の人より管理職の人の方が「不安がある」と回答した人が多い傾向にあった。上位5県による違いや職種による違い、会社規模による違い、性別による違い、年代による違いには関係はなかった。



図-37 メンタル面の不安の有無

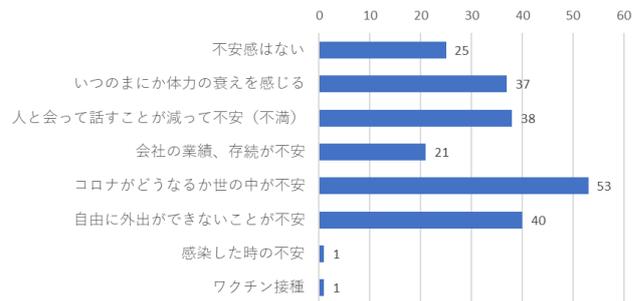


図-38 メンタル面の不安の内容

d) 仕事の不安

「仲間や部下の意向がわかりにくい」や成果や評価が適切に行われるかなどの不安が多いことは評価が給料につながることも影響していると考えられる。

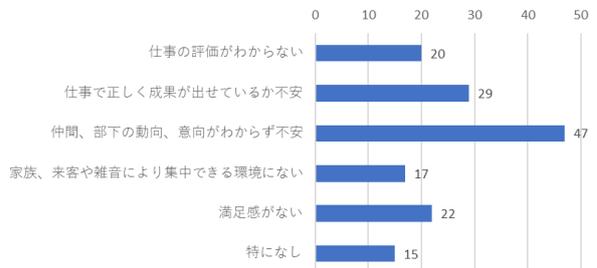


図-39 仕事の不安

e) テレワークの効果と評価

テレワークのポジティブな評価として、「面倒な付き合いが減ってよい」、「家族との時間や自分の時間が増えて良い」という流れが感じられる。家族との関係を見ると「変わらない」が最も多いが、「関係が良くなっ

た」とする人が、「関係が悪化した」とする人を大きく離している。家族が「通勤による感染を心配している」など家族のストレスもあると考えられる。

また、クロス分析の結果、居住地による違いには関係はなく、6割の人が良い評価をしており、悪い評価をしている人は1割強の人がいる。また、職場での立場による違いに少し傾向がある。一般職においては6割の人が良い評価をし、1割の人が悪い評価と回答しているのに対し、管理職においては5割の人が良い評価をし、2割の人が悪い評価と回答している。

さらに、職種の違いによる傾向として、技術職(専門職を含む)は、5割の人が良い評価をしており、「どちらも言えない」を含めると9割の人が評価され、悪い評価は1割の人と言える。また、年代の違いによる傾向として、60歳以上の方は4割強の人が良い評価をし、1割強の人が悪い評価と回答している。それ以外の年代は5~6割の人が良い評価をしているのに対し、悪い評価は各年代で1~2割弱の人が回答している。また、年代が下がるにつれ評価は下がり、20歳代で7%迄下がってきている。ストレスが大小の違いや、体調の良し悪しの違い、性別による違いには関係はなかった。

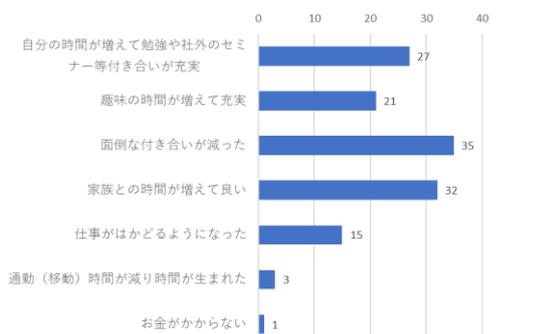


図-40 テレワークの効果

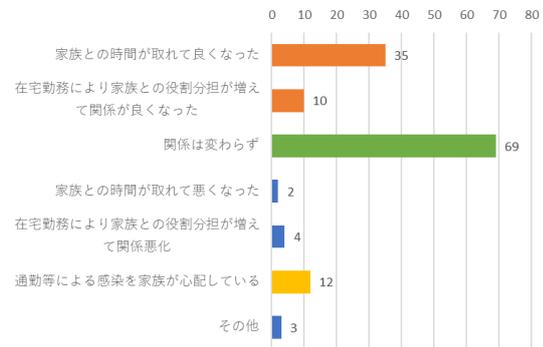


図-41 テレワークの評価

(7) コロナ禍の不安

「人とのコミュニケーション不足」、「感染の不安」、「メンタル面の不安」、さらに「業績の不安」など様々な不安が確認できる。

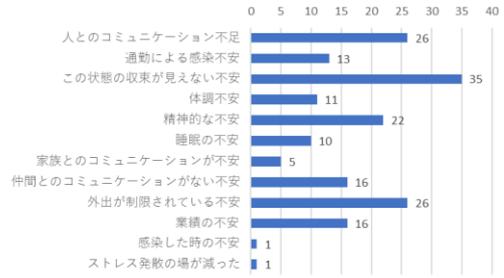


図-42 コロナ禍の不安

4. コロナ禍の総合的な評価

以上の調査よりコロナ禍における生活・健康面からの総合的な評価とそこから発生する課題を表-1に示す。

表-1 生活・健康面からの総合的な評価と課題

調査で明らかになった項目	課題
<b>《そもそもの居住状況》</b>	
・4人に一人は近隣に交流している人がいない ・独居が20~25%おり近隣との交流が少ない	⇒独居老人問題
<b>《コロナ禍における行動と生活》</b>	
・75%の人は生活が様変わりしたと回答し、全体としては外出回数が減っている ・交通機関による外出を全くしていない人もいる ・出張がなくなった人が40%いるが、以前から変わらず出張をしている人も21%いる	⇒交通機関の運営・経営問題
・様々な場所への外出は減っているが、仕事で職場等への外出はあまり減少していない ・現役世代では勤務の回数が減った人は40%	⇒勤務形態の変化が不完全
<b>《テレワーク》</b>	
・勤務体制に変化がない人が37%いるが、テレワーク経験者は60%に及ぶ ・テレワークも基本的な勤務は必ず在宅で行っている状況 ・テレワークで使っている場所を聞くと、自宅以外ではシェアオフィスが多いが、カフェなどの飲食店が使われている実態 ・テレワークにより勤務時間がはっきりしなくなっている人も7%いる	⇒住宅環境の対応 ⇒セキュリティの課題 ⇒勤怠管理
<b>《健康面》</b>	
・歩行の回数が減った人が半数 ・同居家族との時間の増えた人は同居家族がいる人で63% ・自宅での食事回数が増えた人が78% ・すでに体力が落ちていて感じ不安がある人が3割を超える ・ストレスが増えたとする人が48%にも及ぶ ・全年代においてメンタル面の不安定さが見られ、自身でメンタル面の不安があるとした人は46%に及ぶ	⇒家族との関係に影響 ⇒体力の低下 ⇒ストレス増、メンタル面が不安定
<b>《総合的な評価》</b>	
・テレワークのポジティブな評価として、面倒な付き合いが減ってよい ⇒家族との時間や自分の時間が増えて良いと言う流れが感じられる。 ・家族との関係を見ると変わらない+関係が良かったとする人が、関係が悪化したとする人を大きく離している ⇒テレワークは家族との関係でも良い方向	

上記表-1 のコロナ禍における生活・健康面からの総合的な評価とそこから発生する課題についてももう少し考察する。

まずは、居住状況は独居が 20～25%いることから近隣との交流が少なく、4 人に一人は近隣と交流している人がいない現状がある。また、年代的には高齢者はほとんどおらず、中高年層の現役で活躍している。しかし、この状況下が数年進むにつれて独居老人問題に発展していく可能性も考えられるほか、フレイル等により健康寿命の短縮が危惧される。

次にコロナ禍における行動と生活で、明らかに変わったことは、勤務体系が「在宅勤務への移行」または「テレワークへの移行」が主体になったことである。その結果、出張がなくなる又は出張回数が大幅に減り、通勤時間そのものが要らなくなった。一つ目は交通機関の経営問題である。私たちの生活における公共交通機関はなくてはならないものだけに、移動環境が変わることがあれば大変な問題になる。一方テレワークは 6 割の人が経験している。基本自宅が主流であるが、シェアオフィスやカフェなどの飲食店を使っているところもあった。会社外でのテレワークはセキュリティの課題やはっきりしない勤務実態など、解決しなくてはならない課題であると言える。その結果、コロナ禍が収まる気配や緊急事態宣言終了後は通常勤務に戻している企業が多くあったようである。

二つ目は明らかに家族と一緒にいる時間が増えたことである。独居者も含めて自宅で食事をする回数が大幅に増えたと回答している。その傾向は居住地による違い、性別による違い、会社規模による違い、職種による違い、立場による違い、家族のいるいないにかかわらず、増えたと回答した人は 8 割を占めたことである。家族との関係に大きく影響を受けている。その結果、起きたことは家族との時間が多く取れるようになり、「家族との時間が増えて良かった」、「仕事からみの面倒な付き合いがなくなった」、「自分の時間が取れるようになり勉強やセミナー参加、趣味などができるようになった」と多くの方が良い評価をしている一方で、「家族との時間が増えて家族関係が悪くなった」という人もいた。その理由は「家庭での役割分担が増えた」ことが起因している。「家族との時間が取れてよい」と回答している人の傾向は、20～30 代の女性と 30 代の男性に多く見受けられた。逆に「家族との関係が悪くなった」と回答した人の傾向は、少ない人数ながら 40～50 代の男性に多く見受けられた。

三つ目はテレワークを含めた勤務体系が大きく変化し、通勤を含め職場に行くことが少なくなるなど、外出の機

会が減り、自発的な行動制限を自らに掛けている人が多くいたのではないかと調査からも推察される。ここで、体力の低下やストレス等のメンタル面の不安定さなど、健康面に大きな影響を与えている。在宅勤務ひとつを取っても、家族との時間が取れやすくなる一方、仕事としては「家族、来客の雑音により集中できなくなる」など、ストレスの増大につながる要因にもなっている。しかし、在宅勤務でストレスが減ったと回答した人もおり、その全員が女性であった。その理由も会社での勤務そのものにストレスがあったと回答している。

そして、同時に「歩行の回数が減った」ことによる運動不足や「コロナ禍のまん延」によるストレス拡大など、健康面に大きな影響をもたらした。調査の結果、5 割の人が歩く時間など「運動が減った」と回答している。また、行動変容の伴わない人にとっての単なる行動変化は、運動の有無に関係なく体調の変化やストレスを受けている人が多くいる。そのストレスの増えた人ほど不安感を抱えている。同時に体調が悪くなった人も多くいる。一方、そうした環境下でも運動不足を補うために、ジョギングや散歩、ストレッチなど自分で運動不足を補完する人や家族との団らんや趣味を活かした行動など、ストレスを抑える工夫を自ら起こしている人もいる。

以上のことから、このようにコロナ禍でやむを得ず変化していく状況において、単なる行動変化でなく、内面的な意識・心の持ち方・考え方も変わることで起こる行動変容を実践できている人もいることがわかる。今後も起こりうる事態にいち早く家族を含め行動変容を起こすことが、課題解決の重要な要因であるとともに、フレイル等により健康寿命の短縮を抑えることにも繋がると考える。

## 5. 引用文献

- 1) 松原淳・秋山哲男・山中英生・池田典弘・井上俊孝・海保裕一・千葉真・平塚秀樹 (2021). 新型コロナ禍における多様な人々の行動と意識の変化のアンケート結果 (第一報), 日本福祉のまちづくり学会第 24 回全国大会発表論文, 2021.10.17.
- 2) 松原淳・秋山哲男・山中英生・池田典弘・江藤和昭・藪内一彦・千葉真・海保裕一・井上俊孝・竹浪仁・平塚秀樹・酒向正春 (2021). コロナ禍における行動と意識の変化, 土木計画学研究講演集 vol.64, 31-10.

(令和 4 年 1 月 20 日受付) (令和 4 年 1 月 20 日受理)